

バルザックの非宗教的宗教とレアリスム

La religion areligieuse de Balzac et son réalisme

佐 野 栄 一

一 バルザックの非宗教的宗教

一八三二年から三五年にかけて、バルザックは、『ルイ・ランベールの知の物語』および『セラフィタ』を執筆し、既に書き上げていた『追放者』（一八三二年）とともに、三作を『神秘の書』と題して出版した（一八三五年十二月）。この前二書について、バルザックは、執筆中から、後に妻となるハンスカ夫人に宛てた手紙で、自分の哲学思想、宗教思想を作品中で縦横に展開させおり、その内容には強い自負がある旨をたためている。一八三四年五月十日付の手紙では、二つの作品を『セザール・ビロトー』とともに、「人には理解されない、高邁な思想の作品」（*Lettres à Madame Hanska, Delta, tome I, p.212*）であると述べ、一八三五年三月十一日付の手紙では、『セラフィタ』、そこには衝撃があることでしょう。わたしはパリっ子の冷笑を受けるかもしれませんが、すべての特権的な人の心には感動を与えるはずです。（・・・）『ゴリオ』は毎日でも

書けますが、『セラフィタ』は一生で一度しか書くことができないのです」(ibid. p.311)と語っている。

ところが、バルザックが「高邁な思想の作品」と自認するこの『神秘の書』は、カトリックの検閲聖省から異端宣告を受けてしまう。この事態に、ごく普通のカトリック教徒であったハンスカ夫人は大いに動揺し、誇らかに作品を語っていたバルザックも、こんどは夫人を宥めるために意を尽くさねばなくなる。一八四二年七月十二日付の手紙は、そうした状況でしたためられた。

「さて、あなたのお手紙にあった重大な質問にお答えします。政治的には、わたしはカトリック教徒です。ボスュエやボナルドと同じ立場で、けっしてその立場から離れることはないでしょう。神の前では、わたしは神秘派教会の聖ヨハネの宗教の立場です。この宗教だけが真の教義を保っているからです。これがわたしの心底です。」(op.cit. tome 2, pp.90-91) (強調は、原文による。なお書簡の日本語訳は、東京創元社『バルザック全集』二六巻、私市保彦訳に従った。)

ここで述べられている「神秘派教会の聖ヨハネの宗教」とはどのようなものであろうか。

そのような宗派や教団があった事実も、バルザックがこの宗教の立場について論じたり語ったりした事実も見当たらない。おそらくは、『ルイ・ランベール』と『セラフィタ』で展開した自分の哲学的宗教的思想にあえてそのようなレッテルを貼り、そう呼ぶことでハンスカ夫人の安心感を得ようとした、と推理するのが妥当であろう。だが、なぜ「神秘派」で「聖ヨハネの宗教」なのか。それは何を意味しているのか。どこから来ているのか。それを知ることが、あるいは少なくとも、合理的な推断を下すことは、バルザックの特異な思想

とその文学の特徴を把握する上で、重要な要件の一つであろう。

言うまでもないことであるが、キリスト教において、神とは、万物を創造し、世界の源にあつて超越的で絶対的な力を持ち、それをあらゆるものに行使できる存在である。また、神は完全であり、永遠であり、いかなる外的作用も受けず超然と世界に君臨している存在である。

であるならば、キリスト教が前提とする神の完全性と万物創造との間には重大な背理がある、とバルザックは考える。

「神と〈大きな全体 Grand Tout〉との関係を考えると、両者の間には二つの状態しかありません。〈物質 Matière〉と神とは同時存在なのか、それとも神だけが〈物質〉よりも先に存在していたのか、このどちらかです。」(Seraphita, Pleiade XI, p.809 日本語訳は、国書刊行会版『セラフィタ』の沢崎浩平訳に従った。以下同書からの引用は、断りがない限り沢崎浩平訳による。)

「仮に世界が作られたものと考えますと、もはや神はありえません。自分はいずれ世界を作る気になるだろうというのを、どうして神は永遠にも等しい長い期間にわたって知らずにいたのでしょうか。その結果を前以てどうして知らなかったのでしょうか。」(Louis Lambert, Pleiade XI, p.654 『ルイ・ランベール』の日本語訳は、東京創元社『バルザック全集』の水野亮訳に従った。以下同書からの引用は、水野亮訳による。)

『セラフィタ』において、バルザックは、神と「大きな全体」、すなわち世界ないし万物との間には、二つの

状態しかない、と述べたうえで、そのどちらの状態においても矛盾が生じる、と指摘している。

まず、神と物質（元物質。万物創造の材料物質）とが同時にあった場合、神が物質をもとに、あるとき世界を創造した、ということになるが、なぜ創造したのか。必要だから。ではなぜ必要になったのか。なければ不完全だと気づいたから。であるなら、「自分はいずれ世界を作る気になるだろうということ、どうして神は永遠にも等しい長い期間にわたって知らずにいたのでしょうか。その結果を前以てどうして知らなかったのでしょうか」ということになる。

完全なる神が世界を創造したなら、世界は完全なものでなければならぬ。不変で、不動で、永遠でなければならぬ。ところが万物は変化し、世界は恒常的に動いている。最も神に近いとされる人間には、欠陥があり、墮落した多くの悪人がいる。完全なる神が作ることに失敗したとすれば、この神は神の定義と矛盾する。

次に、神だけが最初にあったとする場合、万物は神の中の何かから発生した、あるいは神から流れ出したということになる。世界が神から生じた以上、万物には神の本質が宿っており、万物はやはり完全でなければならないが、世界は不変でも不動でも永遠でもない。

それゆえ、神を万物を創造した完全で永遠の人格神のように捉え、そこから神とこの世界との関係を説明したあらゆる教理は破綻する。それは、キリスト教に限らず、すべての一神教において同様である。バルザックは、セラフィタをとおして次の様に言っている。

「地上 la Terre」は様々な宗教の勝利のために力を尽くしてきましたが、それらの宗教が生まれるものとなったこの二つの源は、両方とも同じように有害です。」(ibid., p815)

では、バルザックにとって、神とは何なのか。世界はどのようにして生まれたのか。

『ルイ・ランベール』の断章において、バルザックは、世界の根源に関して次の様に記している。

「地上の一切は電気、熱、光、ガルヴァーニ電流、磁流などと適切ならざる名前で知られている若干の現象の、共通基盤である〈エーテル性実体 Substance éthérée〉の産物である。この〈実体 Substance〉の普遍的变化が、俗に〈物質 la Matière〉と呼ばれるものを形づくる。」(ibid. p.684)

「地上の一切は〈運動 le Mouvement〉と〈数 le Nombre〉によってしか存在しない。」(ibid. p.689)

「〈運動〉はいわば活動する〈数〉である。」(ibid.)

彼によれば、世界の根源にはただ一つのもの、すなわち「実体 Substance」あるいは「エーテル性実体 Substance éthérée」しかなく、それが変化してあらゆる「物質 la Matière」つまり万物ができたとする。その生成に関わるのが「運動 le Mouvement」であり、その「運動」は「数」によって支配されている。

「〈運動〉がなければ一切はおなじ一つのものである。運動の産物はどれもこれも本質において同じで、たださまざまな能力を生み出した〈数〉によってちがうだけである。」

あらゆるものの根源は単一である、という考えは、バルザックの哲学思想の基本である。物質においてではなく、動物においても、人間社会においても、バルザックは常に、単一のものからあらゆるものが生まれる、と考える。『人間喜劇総序』においては、次の様に言っている。

「ただ一つの動物があるだけである。造物主はあらゆる組織的生物存在 *les êtres organisés* を作るのに、唯一で同一のパターン *patron* しか用いなかった。動物とは、一つの原理 *un principe* が、外的形態をとったものであり、もつと正確に言えば、その原理が様々な環境の中で発展を求められた結果、多様な形態をとったものである。」(*Avant-propos, Pleiade I, p.8*)

ここで述べられている「原理」とは、ルイ・ランベールの言う「数」と同様のものであろう。それは組成の構造を規定し表現するいわば数式のような性質を持つものと考えられる。「原理」は「運動」を支配し、「物質」という、動物の場合は、「形態」という、「結果」を作り出す。物質化ないし形態の取り方は多様だが、「運動」に書きこまれていくプログラムや機能様式、ないし作動規律は同一で、普遍的で、変わらない。だから「唯一で同一のパターン」なのである。

再びルイ・ランベールの哲学に戻れば、最初の単一物である「実体」に「運動」が与えられたとき「物質」が生まれる。あるいは「実体」にはプログラムが内在していて、出現と同時に運動が始まる、と理解する方が適切であるかもしれない。ともあれ、運動が与えられた結果、生じるものは多様であるが、それはすべて「数」によっている。つまり「数」とはプログラム、法則、原理と換言できるものと考えていいだろう。

この「数」を、知性ある人間は世界の観察とおして知ることができる、とバルザックは考える。しかし、

「数」の上にはさらに「言葉」がある。

「数」は人間にしか属さない知性の証拠であるが、人間はそれによって〈言葉 la Parole〉を知る域にまで達することが出来る。」(ibid., p.689)

この大文字の「言葉 la Parole」とは何なのか。

バルザックは、セラフィタの口をとおして、次の様に述べている。

「私にとつては、物体の性質は物体の原理の指標ですし、その特性の記号でもあります。これらの原理があなたがたにはとらえられない親和力を生むのです。それは中心に結び付いているのです。生命に分け与えられている様々な種は、互いに呼応する尽きることのない泉です。(略) あなた方は神を〈創造者〉と呼んで、神を小さなものにしています。神は、植物も、動物も、星も、あなた方が考えているような仕方では作りませんでした。神がいくつもの手段を用いることなどありうるでしょうか。神は構成の単一によって作ったのではないのでしょうか。ですから神はいくつかの原理だけを与え、それらの原理が、神の一般法則にしたがって、それぞれが置かれた環境に合わせて展開されることになったのです。ですから、ただ一つの実体と運動だけです。ただ一つの植物、ただ一つの動物だけです。しかし、連続的な関係が与えられたのです。実際、親近性は、皆、隣りあう類似性によって繋がっているのです。そして世界の生命は、あなた方が、皆、飢えに駆られて食物を摂るように、飢えのような渴望によって中心へと引き寄せられるのです。」(*Séraphita*, op.cit., pp.826-827)

バルザックの述べていることは、まさに「神秘派」の謎に満ちており、すべての文言を合理的に結びつけて解釈することを困難にしているが、ここでは、ある程度明確に捉えられれることを拾って、彼の哲学の大枠を捉えてみたいと思う。不明な細部を切り捨てるのであるから、それは、バルザックの神秘主義的であると同時に合理的でもある哲学思想・宗教思想の豊かさを削ぐことになるであろうし、不完全の誹りを免れ得ないだろうと思う。しかし、私は、バルザックの思想の根本的特色として、科学的性格があると信じている。だから、著作の合理的な部位だけを捉え、バルザックの豊かな想像力で結びつけられているさまざまな不可知なあるいは不可解な細部を切り捨てたとしても、骨格は押さえることができるだろうと思う。もっとも、科学的性格といっても、今日の科学についての認識と十九世紀前葉の科学についての認識との間には大変な隔たりがあり、たとえば今日では一種の神秘主義と捉えられるメスマーの人間磁気やガルの骨相学も、バルザックにとつては科学であつた。バルザックの科学は、現象とその根源にある原理のようなものを想定して、それを豊かな想像力とバルザック流の合理によって、結び付けるところに最大の特徴があり、厳密性、検証可能な科学的客観性は問題にならない。彼は自己の思索の妥当性を信じており、それを担保しているのは、あくまで自らを抜き出した知性と思考力の持ち主と考える矜持である。バルザックの思考は、観察から原因と結果を結ぶ筋道を見出すことにあり、常に彼流の経験主義的な合理性に基づいている。そこには、豊かな想像力による飛躍と同時に、普遍的であると信じる彼流の論理的妥当性、科学性、合理性が同居しているのである。

さて、これまでの考察を踏まえながら、『ルイ・ランベール』『セラフィタ』に依拠して「言葉」へと至るバルザックの哲学思想・宗教思想をまとめれば、バルザックにとつて、世界には永遠で不動の物質はなく、世界は常に運動しており、運動によってあらゆるものが生成する。この運動には原理があり、運動によって「実

体」から物質が生成し、また同じく運動によってその物質は別の物質に変化するが、すべてはこの原理に従っている。変化は物質と運動の置かれた状況ないしは環境次第であり、無限であるが、万物の創出は常に運動によっており、そこには、それを支配するただ一つの原理があるだけである。したがって、万物には、たとえそれがいかに多様であろうと、根源に共通の単純な同一の「実体」と「原理」があり、それゆえに、万物には何等かの共通性、類縁性、「親近性」、「親和力」がある。

世界の初めは、ただ一つのもので、それが出現したと同時に運動が始まり、ただ一つのものが次々に多様なものに変化し、運動は永遠に続き、無限に多様なものが生み出される。しかし、そこに働いているのは同じ原理であり、この原理の源、あるいはすべてを包括する根源的原理が「神」である。

だから、「神」が世界を創造したのではなく、世界は、「神」という原理にしたがっておのずから生成していったのである。万物には一般法則があり、個々の一般法則が従う原理を次々に遡上して行けば、ついには万物を貫く根本原理に行き着きうる。ただ一つの「実体」と、ただ一つの「原理」（根本原理）に行き着きうる。

さて、世界には一つとして完全に同一なものもなければ、ひと時として不動の時はない。その意味で、あらゆるものは限りなく多様で、止まることのない時間の流れの上にある。すべてのもの、すべての現象は無限にみな違っている。しかし、人間は知性によって、無限の多様性から「数」という不変不動の原理ないし法則を捉えうる。さらにその「数」ないし原理・法則を、より高度な知性の働きによって究極まで抽象を推し進めて行くと、最終的な根本原理にまで至りうる。それが「言葉」ないしは「神」である。それは、万物に宿り、万物の原因と結果をつかさどり、万物の根源をなすものである。

ルイランベールは言う、

「されば宇宙は単一における多様である。運動は手段であり、数は結果である。終極は、神であるところの単一への万物の帰還である。」(Louis Lambert, op.cit., p.690)

無限の多様性は唯一の単一、換言すれば、原理を内包する根源的「実体」に収斂しうる。であるとすれば、「神」とは人格神のようなものではなく、世界の創造者でもなく、世界のすべてを統御している、謂わば大原理、根本原理にほかならない。それを、バルザックは大文字の「言葉」と言っている。神を知ることが、万物が従う根本原理を知ることであり、世界をまるごと理解することである。人が神を知ることがはきわめて困難であるが、不可能ではない。ルイ・ランベールは言う、

「数は人間にしか属さない知性の証拠であるが、人間はそれによつて言葉を知る域にまで達することができぬ。」(Louis Lambert, op.cit., pp.690-691)

この様な神の捉え方は、キリスト教とは全く相容れないものである。しかし、最終的な神についての概念が相違しているとしても、まさにバルザックの思想を代弁しているかのような文言から始まる聖書の記述がある。それが『ヨハネによる福音書』であり、次のように書かれている。

「初めに言葉があつた。言葉は神と共にあつた。言葉は神であつた。この言葉は初めに神と共にあつた。すべてのものは、これによつてできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。」

一、「初めに言葉があった」。

二、「言葉は神であった」。

三、「すべてのものは、これによってできた」。

聖書のこの文言は、バルザックの哲学思想から捉えれば、宇宙の創造を説明している、と言いうることができるだろう。「言葉」とは根本原理であり、それが「神」である、と。

おそらく、バルザックは、キリスト教の神を信じてはいないだろう。しかし、ハンスカ夫人に真実を言うことはできず、彼女の安堵を得るためには、キリスト教徒として通さねばならない。その際、もつとも嘘偽りの少ない言い方が「神秘派教会の聖ヨハネの宗教」ということになったにちがいない。

ともあれ、たとえバルザックが神を信じていたと言うとしても、それはキリスト教が様々な理論と想像によって作り上げた神とはまったく異なるものであり、そもそもそこには人を導く神の教えや命令もなければ、人の行動を律する道徳もない。神の言葉を聞くのは神に選ばれた預言者ではなく、究極の知性を有する天才である。世界にはただ、「実体」と究極的な一つの大原理、という意味での「神」があるだけである。倫理も道徳も、神の声の多くも、おそらくバルザックにとって、人間が政治的必要から生み出したものなのである。だから、宗教的には無神論と言っているだろう。

『人間喜劇』において、バルザックが、暗に、デプランに自分を重ね合わせ、彼の無神論をまったく肯定的に描くのもそれゆえと思われる。

「デプランの純粹で率直な無神論は、多くの学者や世界でも最も優れた人々の無神論に似ていた。とうてい

打ち破ることのできない無神論者の無神論、宗教を信じる者にはそんな者がいるなど容認しえないような無神論者の無神論に似ていた。(中略) この男も、多くの素晴らしい天才たちが神の許しを得られる臨終の改悔をせずに死ぬように、さいごまで悔い改めることなく死んだ。」(*La Messe de l'athée, Pléiade III*, pp.386-387)

しかし、バルザックは、その美学において、フランスの社会がよりよき社会であり、フランスの民衆がよりよき民衆であるためには、フランスのキリスト教、つまりカトリックと、カトリックと車の両輪のごとく不断の関係にある王政とが、必須であるとも考えていた。哲学思想においてキリスト教の神を否定しながら、政治思想においてキリスト教の存在を社会に必須のものと考え、強く支持していたのである。

『無神論者のミサ』の主人公デプランとブルジャは、まさにそうしたバルザックの政治思想を表象しているように思われる。敬虔で素朴なキリスト教徒ブルジャこそはバルザックの思い描く理想的民衆の一形象であり、それゆえに「打ち破ることのできない無神論者」デプランは、自己の哲学的信念も矛盾も乗り越えて、毎年ブルジャのために教会でミサをあげる。教会に喜捨して形式的にミサを挙げるのではない。純朴な美しい民衆の心を持つブルジャのために、また深く神に帰依し救いを乞い願っていたブルジャの魂ために、ミサを創設し、跪き、その安寧を願って心からの祈りを捧げるのである。「とうてい打ち破ることのできない」「宗教を信じる者にはそんな者がいるなど容認しえないような無神論者」のデプランは、バルザックの思想を反映して実に象徴的である。この矛盾こそは、バルザックのキリスト教に対する、離反と融和の同居を示すものではないだろうか。デプランが神に祈る姿を見て、弟子ビアンシオンが、師を無神論者と言うことはできない、と躊躇を覚えるとするれば、バルザックについてもまた、宗教の説く神を否定するにもかかわらず、カトリック教徒ではないとは言いきれないのかもしれない。

二 バルザックの哲学思想とレアリズム

世界の根源に一つの「実体」と究極的原理としての「言葉」を想定するバルザックの哲学は、現代科学が、一般相対性理論と標準理論を統合して、宇宙のすべての現象を一つの数式で説明しようとする、所謂「神の数式」に、きわめて近い考え方であるように思われる。

「神の数式」は、宇宙の始まりから今に至るまでを、また宇宙に存在するあらゆるものの生成を、一つの数式で説明しようとするものである。「神の数式」は、それによつて説明できない事実や現象が発見されるたびに検討され、書き改められる。科学は、時と共に進歩し、多くの謎を解明するが、謎は解明されるたびにまた新たな謎を生むから、世界の未知は限りなく、「神の数式」は永遠に完成しないのかもしれない。しかし、そこには、これまでの人類の英知が、わずか一行の数式で表現されている。宇宙の始まりから現在までを、素粒子の世界から大宇宙までを、これまで分かっている限りのあらゆる存在の根源と生成とを、整然とした完璧な論理で説明している。人類が想像しうる全宇宙の、また存在が認められるすべての素粒子の、あらゆる運動の原因と理由を秩序づけ、結果を説明するのが、このわずか一行の数式なのである。それは、人類が発明した驚異の、そして最も美しい抽象と言つていいだろう。

科学が、観察から法則を見出し、見い出された諸法則からさらに上位の一般原理を見出し、その究極に「神の数式」を見つけようとするのに対して、バルザックは、それでは永遠に「言葉」ないし「神」を見出すことはできない、と考える。『レイ・ランベール』で、人間は「数」を知り、そこからさらに「言葉」を知る域にまで達することができる」(op.cit., p.690-691)と述べる一方で、『セラフィタ』では、「人間の理性の

物差しで神を測ろうとしても、すぐに目盛りが足りなくなり、神に到達することはできないでしょう。それならば、神を知るためには別の道を求めなければならないということは明らかではないでしょうか」(Séraphita, op.cit. p.827)とも述べているのである。つまり、人間には「言葉」・「神」を捉えうる可能性はあるが、それは理知的方法によっては不可能である、ということである。

たしかに、無限に多様な外的世界の観察から法則を抽象しつつ、おおもとの原理(「言葉」・「神」)にたどり着こうとしても、人間の短い生涯においては、可能な観察の数は限られており、それによって理性が把握しうるものは、自然から見れば、わずかでしかない。しかも、人類の長い歴史の中で蓄積された知から出発して、たとえ新たな発見によってより高次の原理にたどり着けたとしても、原理を抽象した領域そのものが有限であり、無限に多様で多くの未知のある、しかも常に運動している自然に、けっして追いつくことはできない。したがって、「人間の理性の物差しで神を測ろうとしても、すぐに目盛りが足りなくなってしまう」のであり、結局、神を見出すことは人間の理性的方法によっては不可能である、という考えにいたる。

では、どうやって「言葉」ないし「神」を見い出しようとバルザックは考えるのか。「その道は私達の内部にあるのです」。「地上の事物に向けられる目よりもっと鋭い目を自分の内部に発見するのです」(ibid.)と、セラフィタは言う。

しかし、ここで留意すべきは、誰もが自己の内部に透徹した目 *des yeux perçants* を持ち、内部に何かを見ることが出来るわけではない、ということである。

バルザックは、人間には、知性のレヴェルにおいてピラミッド状の分布があり、それが可能なのは最上層の天才だけだと考えていた。しかも、この最上層の天才は、「言葉」・「神」を知的な抽象によって認識するのではなく、その多様な要素を精神に吸収して、精神をより高い次元のものへと変容させ、その結果、それを総体

として感じる、という手段によって可能となると考えるのである。そこにはバルザックの独特の神秘主義がある。しかも、この謂わば〈人間知性のピラミッド状分布理論〉と、前章で述べたバルザックの科学的神秘主義的な宗教哲学理論とは表裏一体の関係を有している。

バルザックは、『ルイ・ランベール』の断章の中で、次の様に言う。

「(2) 脳は一個のフラスコで、〈動物〉は各自の体組織が〈実体〉から吸収しうるものを、このフラスコ装置の力にしたがってそこへ運びこみ、そして〈実体〉はそこから意志に変形して出てくる。」(Louis Lambert, op.cit., p.685)

「(3) 人間において意志は一つの力になるが、その力は人間特有のもので、強度においてあらゆる動物種のそれをしのぐ。」(ibid.)

「(4) 意志は〈実体〉から絶えず栄養を摂取することでこれに依存する。意志は思惟によって〈実体〉のあらゆる変化のなかに入りこむことで、そこにふたたび〈実体〉を見出す。思惟は〈実体〉の変形と結びついた人間意志の特殊な産物である。」(ibid.)

「(5) 人間の頭脳装置の完成度の大小から、思惟が帯びる無数の形が生じる。」(ibid.)

「(6) 意志は俗に五官と名づけられた器官によって行使される。五官は、ものを見る機能というた一つの感官にすぎない。味覚とおなじく触覚、嗅覚とおなじく聴覚は、〈実体〉の変化に順応した視覚である。(略)」(ibid.)

「(7) ものを見る機能という唯一の感官の領域に、形をとって落ちてくる事物は、すべて若干の基本体に還元される。(略) 音、色、かおり、形という、人間とのかかわりにおける物質の四つの現われ方は、同一の起源を持つ。(略) 人間にとつて、一切は〈実体〉から出てくる。〈実体〉の変形は〈数〉によって、調合の仕方によって違いがあるだけである。(略)」(ibid., pp.685-686)

バルザックの考えでは、あらゆる物質は、ある根源的な一つの「実体」から生じ、その「実体」は光や熱や電気や磁気など様々のものに姿を変える。また、「実体」から生まれた物質からも「実体」(光や電気や磁気などを含む何かからぬ目に見えないもの)が放出され、人間の脳はそれを吸収し、吸収された「実体」から脳は「意志 la Volonté」を形成する。この「意志」とは、物質を感じ得とらえることによってもたらされる意識と言ってもよく、持続的な意識によって認識が生じ、その認識から原理に関わる「思惟 la Pensée」が生まれる。そして、「思惟」は、「実体」が変化したものにほかならない様々な物質を、感覚をとおして観察することによってその原理を抽象するが、その過程で共通して根源的「実体」を見い出す。つまり、あらゆる物質の素が「実体」であることを発見する、ということ述べていると思われる。さらに、バルザックによれば、その思惟の能力には人によって大差があり、無限に多様な形がある。この「思惟」は組織されて「観念 l'idée」になるから、「観念」にも能力の違いによって無数の形がある。バルザックは、様々な人間が有する多様な観

念の世界を3つに大別して、「本能圏 [idée de l'instinct]」「抽象圏 [idée des Abstractions]」「特殊圏 [idée de la Spécialité]」と呼んでいる。そこには明確に序列がある。

〔13〕観念の世界は三つの圏に分かたれる。すなわち本能圏、抽象圏、特殊圏。」(Louis Lambert, op.cit., p.687)

〔14〕まのあたりに見る人類の大部分、これは最もかよい部分だが、彼らは本能圏に住んでいる。本能的な人たちは、抽象という人間の知性の第二段階まで高まることなく生まれ、働き、死んでゆく。」(ibid.)

〔15〕社会は抽象に始まる。抽象は本能にくらべたらほとんど神のような力だが、その抽象も特殊性というひとり神を説明することができる天賦の才にくらべたら、前代未聞の弱きである。(略) 抽象から法律、芸術、利害関係、社会思想などが生まれる。」(ibid.)

〔16〕特殊性は物質界ならびに精神界の事物を、その起源の根幹や結果の末梢にわたって見ることにあ
る。人間界の最もりっぱな天才は、抽象の闇から出発して特殊性の光明に到達した人たちである (特殊性は
species からくる。すなわち視力、観察すること、一切を一目で見ること。また speculum からくる。すなわ
ち鏡、あるいはものをまるごと見てとって評価する手段)。イエスは特殊家だった。彼は事実をその根源と成
果において、すなわちそれを生んだ過去と、それが現われた現在と、それが発展する未来において見ていた。
彼の視力は他人の悟性を見抜いていた。内的視力の完成が特殊性の才を生む。特殊性は結果として直観をもた

らす。直観は「内的人間 L'HOMME INTÉRIEUR」の一つの能力であり、特殊状態は彼の属性である。直観は、それにしたがうものでさえ知らないような、ごくかすかな感覚によって働く。」(ibid. p.668)

〔18〕特殊家は必然的に「人間」の最も完全な表現で、目に見える世界を上位の諸世界につなぎ合わせる輪である。彼はおのれの「内部」によって動き、見、感じる。抽象家は考える。本能人は行動する。」(ibid.)

バルザックによれば、多くの人間は本能圏に留まっており、少数の知的な人間が世界の諸関係を観取して抽象圏に入る。「社会は抽象に始まり」、「抽象から法律、芸術、利害関係、社会思想などが生まれる」。「人間は善、悪、美徳、犯罪というような抽象によって一切を判断する」(15)。つまり、絶対多数の本能圏に留まっている人間の中から、頭脳に秀でた者が抽象圏に入ることができる。彼らは、諸事実の観察から本質的關係を抽象し、抽象されたものから演繹ないしは応用することによって、法律や芸術や社会思想、また善と悪や、美徳と犯罪といった掟や道徳や美学を生み出す。「本能圏」と「抽象圏」の二つの圏は、明確に分け隔てられているのではなく、両圏の間には「中間的存在 des êtres intermédiaires」が多数おり、頭脳の優劣の度合いに応じて、「本能性と抽象性がいろんな割合で際限なしにまじり合っている」(ibid.)。ここから更に上に、「特殊圏 la Sphère du Spécialisme」がある。ここに入ることは「特殊能力・スペシアルテ Spécialité」を持つことである。スペシアルテとは「物質界ならびに精神界の事物を、その起源の根幹や結果の末梢にわたって見ること」であり、「事実をその根源と成果において、すなわちそれを生んだ過去と、それが現れた現在と、それが発展する未来において」見る能力、敷衍すれば、任意の事実を、その本質性において、あるいはその事実の内にある原理を一瞬にして見抜き把握する能力である。曰く、「特殊家 le Spécialiste」とは、瞬時に本質に達する「直

観 intuition」を持つ「人間の最も完全な現れ方 expression」で、自己の内部に「鏡 miroir、あるいはものをまると見てとって評価する術 moyen」を持つ人間である。この圏の中に入ることができるのは、きわめて少数の天才であるが、彼ら天才のほとんどは特殊能力の一部を持つ者にすぎず、抽象圏と特殊圏の「さまざま属性が混じり合って混合物を生み出す」中間的存在にすぎない。だから、根本原理にまで達しうるような真の特殊家はさらに限られた、イエス・キリストのような、奇跡的な存在だけである。彼らこそが、人類の頂点にいます、というのである。

こうして、バルザックにおいては、真の特殊家を頂点に、世界のヒエラルキーが完成する。物質の上に生物があり、生物の上に動物があり、動物の最上層に人間がいる。人間は、最下層の本能圏から最上層の特殊圏まで、ピラミッド状に分布している。そして、これらすべての生物や物質の根源は、単一の「実体」であり、「実体」から万物に至るすべてのものに共通で、すべてのものを律しているのが「言葉」ないしは「神」という根本原理である。そう、バルザックは考える。

ところで、ここで問題となるのは、この原理の性質である。それは、「神の数式」のように、人間の精神による、抽象、という完全な知の産物としての非実質、つまり、無、と考えていいのか、ということである。どうやら、バルザックは、これを無とは考えていない。何らかの形で存在しているものと捉えている。「実体」が、運動によって別の「実体」に変わるとき、この「原理」が働く。われわれは、原理を知るとは、事物の変化を観察して原因と結果から法則を見い出すことだと考える。その場合、それは純然たる抽象であって、無、である。だが、バルザックにおいてはそうではない。働いている「原理」は精神によって捉えられ、蓄積され、変容し、「意志」になり「観念」になり、ついには「特殊家」の「直観」になる。バルザックにとつて、「原理」もまた、おそらく「実体」なのである。だから「言葉」は「実体」であり、「神」も「実体」であり、抽象的

ないしは架空の、無、ではない。その意味で、バルザックの「原理」の性質は、神の実存を否定しない。

では、「神」とともにすべてのものの根源にあつてすべてのものに変化変容する「実体」としての「原理」とは、どのようなものか。それは、たとえば、生物がたった一個の受精卵から誕生するように、しかも、最初の一個の細胞にも、その後変化して発生するあらゆる器官のすべての細胞にも、その個体の全遺伝子情報が揃っているように、最初の「実体」には、既にその後生まれる「実体」のすべてが内在している、ということと考えればいいのかもされない。「実体」は、生物が、発生段階で、一個の細胞に与えられる何かわからぬ任意の外的刺激や条件によって細胞内部のプログラムのようなものから指令が発動され、たった一つの細胞があらゆる器官の細胞に変化発展してゆくように、万物になる、ということである。つまり、「運動」する「実体」のおかれた「環境」によって、あるいは遭遇する「抵抗」によって、単一の「実体」が変化し、すべてが作られる、だが、そのすべてを逆に遡れば、必ず同じ単一の「実体」に行き着く、しかも、始めも終わりも、内に備わっている「原理」は同一である、ということではあるまいか。

さて、「神」を知るには、外界にあふれている何かわからぬ「実体」を高度に凝集しえた精神だけが持ちうる「直観」という「特殊能力」を手に入れていなければならない、とバルザックは言う。「特殊能力」とは、「視力、観察すること、一切を一目で見ること」であり、「鏡」に反映した外の世界から、瞬時に任意の本質を把握する能力である。このとき、重要なことは、「見ること」が、外界を直接視覚で捉えることを意味しているのではなく、外界が映しだされる内界を見ること、要するに、内視を意味している、ということである。それは、バルザックにとって、世界は、外にあるのではなく、内にあるからである。

たとえば、もし、人間がすべての感覚器官を破壊され、見ることも聴くことも、嗅覚も触覚も、すべての感

じる能力を奪われた場合、人間にとって世界は存在しない。世界は感覚によってしか、あるいは感覚から刺激を受け取り、それを総括し判断しうる意識が存在しなければ、捉えられない。つまり、感覚や意識がなければ、世界は何物でもない闇のごときものであり、事実上存在しない。それゆえに世界は外にあるのではなく、内にある。脳の中に存在している。デカルトの「われ思う故に我在り」とは、そういうことであろう。だから、鋭敏な感覚と感覚に緊密に連携する高度な知性を持つ者の世界と、鈍感で低能な人間の世界とは、当然世界は違っている。

ルイ・ランベールは言う、

「事実は何物でもない。そんなものは存在しない。われわれから依然として残るものはただ観念のみ」(ibid., p.687)

また、セラフィタは言う、

「その道(神を知るための道)は私たちの内部にあるのです。〈見者 le Voyant〉と〈信者 le Croyant〉は地上の事物に向けられる目よりもっと鋭い目を自分の内部に発見するのです。」(*Séraphita*, op.cit., p.827)

バルザックにおいては、「物質界ならびに精神界の事物を、その起源の根幹や結果の末梢にわたって見る」(*Louis Lambert*, op.cit., p.688) 究極的な知は、外界からもたらせられるのではなく内界にある。外を見るのではなく内を見ることによって獲得される。特殊家は内部に外界を映す「鏡」を持っており、その「鏡」は、単

に外界を平板に映すのではなく、外界を凝集し本質化して映し出す。つまり、「内的視力の完成が特殊性の才を生む」(ibid.)と言うとき、「内的視力の完成」とは、そうした「鏡」を持つことであり、謂わば「鏡」は、「ものをまるごと見てとって評価する手段」(ibid.)の比喩的イメージにはかならない。

この特殊家に必須の「鏡」、それは、バルザックによれば、ルイ・ランベールのような「真の哲学者」だけが持っているのではない。真の宗教家にも、また真の芸術家にも、「鏡」はなくてはならないものである。セラフィタは次のように語っている。

「ヨーロッパの大都会では、多くの芸術作品が生まれています。人間の〈手〉が物質的自然の印象と同じように、精神的自然の印象をも再現しようとしています。大理石でもって観念を表現している優れた人たちがいます。彫刻家は大理石に手を加え、加工し、たくさんの思想をそこに刻み込みます。人間の手によって、人類の崇高な面全体を、あるいは、邪悪な面全体を再現する力を与えられた大理石があります。大部分の人はそこに人体の外形を見るだけです。もう少し上の段階に位置する人たちは彫刻家が表現した思想の一部を読み取って、その形を賞賛します。しかし、芸術の秘密に通じた人たちは、皆、彫刻家の心を理解します。大理石を見て彫刻家の思想の世界全体を見て取ります。この人たちは芸術の王者です。自然のどんなかな起伏までも映すような鏡を自分の心の中に持っているのです。ところで、私の中には、精神的自然を原因も結果も一緒に映す鏡のようなものがあるのです。」(Seraphita, op.cit., pp.794-795)

セラフィタは、真の芸術家には「自然のどんなかな起伏までも映すような鏡」があると言い、またセラフィタ自身にも「精神的自然を原因も結果も一緒に映す鏡のようなもの」がある、という。さらに、バル

ザックは「シルエット誌 *la Silhouette*」に寄稿した『芸術家について *Des Artistes*』（1830年）において、芸術家とは「自己の精神を、宇宙がまるごと自らを映しに来るような、また国とその風俗や人間とその情熱が思うがままに現われ出るような、鏡、にすることになった人間」（*Œuvres complètes de Balzac*, Conard tome 38, *Œuvres diverses I-II*, p.139）であると語り、『あら皮の序 *Préface de la Peau de chagrin*』（1831年）では「作家は、自分の中に、想念にしたがって世界が自らを写しに来るなにかわからぬ円形鏡 *miroir concentrique* のようなものを持つていなければならない。そうでなければ、詩人も、観察者ですらも、存在しない。というのも、問題は、ただ、見ることだけだからだ」（*Pleiade X*, p.51）と述べている。

バルザックは、物質から立ち昇る「実体」が精神に吸収されることによって「意志」が生まれ、「思惟」が生まれ「観念」が生まれると考えた。したがって、彼においては、科学においても哲学においても宗教においても芸術においても、優れた人間の知性の営みはすべて、世界から放出されているものを精神が取り込むことから始まる。その吸収が繰り返され、凝縮され純化され、関係が見出され、関係の束から原理が見出される。謂わば、帰納が繰り返され、その抽象的営為の末に原理が把握される。しかも、宗教家も科学者も芸術家も、天才はみなこの「原理」の把握から再び世界を見直して、任意の事象の中に潜む「原因」を見出し、その「原理」「原因」のもとで世界を再組織する。あらゆる事象の間にありうる有機的で包括的な関係を見つけて世界を理知的に再組織するのである。謂わば、帰納し、演繹し、世界の在り様を認識し、それを作家の場合には言葉で表現する。

本能圏にある人間の世界は浅く狭く混濁しており、特殊圏にある人間の世界は広く深く澄んでいる。そこには、宗教家、科学者、芸術家の違いはない。知性の営みとそれによって捉えられるものには普遍性があり、たとえ再組織される世界に知能のレベルによって様々な相違があっても、つまり人間の数だけいろいろな世界が

あつても、より高度な知能はより完全なものを、換言すればより真実な世界を組織する。畢竟、究極的真実は一つである、とバルザックは考えている。

セラフィタは言う。

「あなたは物理学を信じていますね。しかし、あなたの物理学もカトリックと同様、信じる行為としての祈りから par un acte de foi 始まるのです。」(*Seraphita*, *Pleiade* XI, p.823)

「祈り」とは、「言葉」・「神」を感じようとすることであろう。思索と言ふこともできるだろう。世界を広く深く認識するために、思索の中で意識をあたかも自然と一体となるかのように大きく開いて、より深く外界を内界に呼び入れ、無心にそれを純化しようとすることであると思われる。ここでは、感覚を研ぎすませながら意識に飛び込んでくるものを内的宇宙の中で照応させ、洗練し、濃縮することが、つまり「円形鏡」のドームをいっばいに開いて世界を映し出し、それを収斂する作業が無意識のうちに行われる。「信じる」とは、こうして抽象化されたものの真実性を信じることであろう。そうであるとするならば、科学も宗教も哲学も、結局あらゆる高度な精神的営みは同一の過程をとおして成果を得るのであり、その意味で、「物理学もカトリックと同様」なのである。「問題は、ただ、見ること」なのである。

バルザックは「考えることは、見ること」(*Louis Lambert*, op.cit., p.615) だと、考えることは「自然を映し出す能力」であり「自然を私達の中に集中する能力」(*Seraphita*, op.cit., p.744) だと、要するに、考えることは内部の鏡で世界の本質を見、感じることでだと繰り返してきた。しかも、この鏡に反映されるものは、バルザックにとって、しばしば容易に論理では括れない論理を越えた何か分からぬ本質的なものである。それゆえ、

そのことを宗教的に言い変えるならば、神を信じ、神の言葉を感じようとし、ひたすら精神を外界にたいして受容的にすること、と言い換えることができる。

「祈りは魂を神に繋がります。あなた方は、木の根が大地と一体となるように、神と一体となるのです。あなた方の血管は事物の原理に繋がり、あなた方は世界の生命そのものを生きているのです。〈祈り〉はあなた方の能力と諸々の元素を結合させ、あなた方を〈物質界〉に浸透させることによって外的な確信を与えます。あなた方の本質を広げ、〈霊界〉の本質と混ぜることによって、内的な確信を与えます。」(*Seraphita*, op.cit., pp.847-848)

バルザックにとって宗教というものの本質がこの様なものであるならば、地上のあらゆる宗教はただ一つのものである。また、教祖とか聖人とかは、神に選ばれた特別な人間なのではなく、自己の知を完成させ、特殊能力を獲得した人間である。ルイ・ランベールは、次のように伯父宛の手紙に書いている。

「スウェーデンボルグは明らかにあらゆる宗教を、というよりもむしろ唯一の宗教を一身に具現しています。宗教的儀式には際限もなく様々な形があったにせよ、その趣旨や形而上学的な構成はけっして変わりませんでした。要するに人間には一つの宗教しかなかったのです。」(*Louis Lambert*, op.cit., p.656)

また、セラフィタは言う。

「モーゼも、ヤコブも、ゾロアスターも、パウロも、ピタゴラスも、スウェーデンボルグも、最も人に知られていない〈神の使者たち〉も、最も輝かしい〈神の預言者たち〉も、あなた方がなろうと思えばなれる人間よりも優れているわけではないのです。」(*Seraphita*, op.cit., pp.825-826)

バルザックにおいては、宗教はただ一つであり、宗教を含め、学もただ一つである。芸術は哲学であり、哲学は科学であり、科学はまた宗教である。万物の根源を理解し、万物のあらゆる関係を了解し、万物の照応を感得し、万物の果てを観入し、万物との本質的調和と合一に至りうる学こそが、彼にとってはただ一つの宗教であり、ただ一つの科学であり、ただ一つのあらゆる知的営為の完成形なのである。

バルザックは『無神論者のミサ』の中で、「偉大な人間にあつては、様々な性質が互いに密接な関係にある」(*La messe de l'abbé, Pleiade III*, p.388)と述べ、「天才はみな当然のこととして精神の視覚 *une vue morale* を持っている」(*ibid.*)と述べ、天才の一人であるデプランは「外科医として偉大になりえたと同様に、大臣になつても偉大になりえたらう」(*ibid.*)と書いている。バルザックはあらゆる天才は、たとえその天才が発揮される領域が違つていたとしても、共通の特質を持つており、その働きによつて得られるものには普遍性がある、と考えていた。どの分野にあつても、天才は自己の内部に持つ「円形鏡」ゆえに卓越した能力を発揮しうると考えるのである。

そして、言うまでもなく、バルザックは、自分自身も、この特殊能力を持つ天才だと考えていた。

そのバルザックにとつて、小説家の仕事とは何か、「文学芸術の目的は観念によつて自然を再現すること

ある」(*Préface de la Peau de chagrin*, *Pleiade* X, p.51)。それは、己の精神が持つ「鏡」に映る世界を見る、あるいは感じて、その抽象的本質から具体的物語を表象することにあるだろう。それゆえ、バルザックにとつて、芸術とは、この世界の諸事象から抽象された本質的なものを、再び想像力によって現実的な事象へ、つまり物語に表現することである。本質が見え、その本質が置かれた状況が出来上がれば、描くべき対象は、方向性さえ与えれば、おのずと運動を始める。

そこからバルザックの小説の形式も成立したのかもしれない。物語の最初に長い描写があるのは、「原理」の「環境」を、あるいは任意の本質が運動するための場を作っている、とも見ることができからである。『あら皮の序』で、バルザックは次の様に語っている。

「詩人や、真に哲学的な作家には、科学では容易に理解しえない、説明しがたく、聞いたこともない、ある精神現象が起こる。それは一種の千里眼 *une sorte de seconde vue* で、想定されうるあらゆる状況で、真実を看取することを可能にさせる。もつとわかりやすく言えば、それは、彼らがいなければならぬところに、あるいはいたいと欲するところに、彼らを転送する何かの能力なのである。彼らは、類推から、真実を見出す。あるいは描くべきものが見えてくる。ある時は対象が彼らのところまでやってくるし、あるときは彼らのほうが対象のほうへと向って行く。」(*Préface de la Peau de chagrin*, *op.cit.*, p.52)

内部に「円形鏡」を持つていれば、真実が見える。真実に具体的状況を設定して運動を与えてやれば、その物語は自動的に動き出す。そのとき「描くべきものが見えてくる」のである。状況は無限にある。様々な物語がありうる。しかし、究極的には、そのすべてに唯一の真実が貫き通っている。

再度『人間喜劇の総序』を引用したい。

「組成の単一性は、用語の使い方に違いがあるとはいえ、既に、いまに先立つ二世紀間、最も優れた精神の人々を捉え続けてきた。(中略) 動物はただ一つしか存在しない。造物主は、あらゆる生命体を作るに際して、ただ一つの同じ型紙しか用いなかった。動物とは、一つの原理が外的形態を取ったものであり、もっと正確に言うなら、一つの原理が、発展することを条件づけられている環境の中で、様々に異なる形態を取ったものである。(動物種)とは、この違いの結果できあがったもののなのである。動物の体系とはこのようなものであると表明し、この考えを持ち続けたことは、ジョフロワ・サン＝チエールの永遠の栄光となるであろう(略)」。しかも、この考えは、われわれが神の力について抱いている観念と合致している(略)。

この体系をめぐって起こった論争よりはるか以前から、この体系を深く確信していた私は、〈社会〉も〈自然〉もよく似ていると考えた。〈社会〉は、人間が活動を展開する環境にしたがって、動物学においていろいろな変種があるのと同じように、様々に異なる人間を作ったのではないだろうか?」(*Avant-propos de la Comédie humaine, Plectide I, p8*)

バルザックは「動物とは、一つの原理が外的形態を取ったものであり、もっと正確に言うなら、一つの原理が、発展することを条件づけられている環境の中で、様々に異なる形態を取ったものである」という。「社会」も〈自然〉もよく似て」おり、「社会」は、人間が活動を展開する環境にしたがって、動物学においていろいろな変種があるのと同じように、様々に異なる人間を作った」と考える。つまり、人間も「一つの原理が外的形態を取ったもの」である。

「あらゆる芸術家が当然享受することを強く願う賞賛に値するためには、結果として現われる社会の様々な事象の諸原因を、あるいは唯一の原因を、探求し、人物や情熱や出来事の膨大な集合の中に隠されている意味をつかみ取らねばならないだろう。要するに、社会を動かす元であるこの原因を追究した後に（私はすでにそれを見出しているとは言わないでおくが）、自然の諸原理について思いを巡らし、社会は何によって真実や美の永遠の基準から離れたり近づいたりするのかを見極めねばならないのではあるまいか。」(*Avant-propos de la Comédie humaine*, op.cit, pp.11-12)

世界の諸事象から抽象された本質的關係は「原因」であり、諸「原因」の分析から引き出されるさらに高次の抽象が「原理」であり、「原理」にしたがって「原因」を具体化し現実化したものが「結果」、すなわち物語、ということになる。賞賛に値する「結果」としての物語を書くためには、「原因」を探求し、その見い出された「原因」から「結果」にいたる「原理」を把握していなければならない。

バルザックは『人間喜劇』を、真の学問がみなそうであるように、全体が緻密に連携する一つの大きな体系にしたいと考えた。そのために、著作全体を可能な限り人物再登場の手法によって有機的にすると同時に、『人間喜劇』を「風俗研究」、「哲学的研究」、「分析的研究」の三部に分け、ピラミッドの底辺から頂点に達して全体が完成するように構成したいと考えた。「風俗研究」は『人間喜劇』の「土台 assise」(*Avant-propos*, op.cit., p.19)であり、「社会のあらゆる結果を表したもの」(*Lettre à Madame Hanska*, Delta tome 1, p.269)である。「その上に、著作の第二部、「哲学的研究」が置かれている。そこでは、どういった社会の筋道 le moyen social からあらゆる結果が生じたかが示されている」。この「社会の筋道 le moyen social」とは、換

言すれば、結果を作りだす「原因」の探求を中心に描くということであろう。この「結果」と「原因」を表象する二つの範疇の上に、第三部「分析的研究」が来る。「原因と結果の後には、その原理が研究されねばなりません。風俗は舞台上の光景であり、原因は舞台裏と仕掛です。原理、それは作者に当たります」(*L'ethre a Madame Hamiska*, *ibid.*, p.270) と、バルザックは述べている。

内視をとおして把握された人間に関する諸法則の本源こそ、人間行動を律している大原理である。それは、「特殊能力」を持った自分によって見い出された、謂わば芸術の「言葉」であり「神」である。すべての作品はそこから、それに従って、生まれる。つまり、唯一の「実体」から、唯一の「原理」にしたがって、すべてが運動し、「外的形態」が形成され、「原因」から「結果」にいたる一部始終としての物語が出来上がる。バルザックは、そこで描かれる〈生きた原理〉を、自分だけの限定的な真実とはまったく考えていない。彼が「鏡」に見るものは、〈彼の真理〉ではなく、〈普遍的真理〉であり、この真理が虚構によって展開され物語となったとしても、それは虚構であって虚構ではない。バルザックは、小説において、常に、真理を、あるいは真実を表している、と考えるのである。真実の姿を社会の様々な場に還元して表現している、と自負するのである。しかも、虚構で真実を語るとは、「歴史という無味乾燥でうんざりさせられる事実の羅列」(*Avant-propos*, *op.cit.*, p.9) よりもはるかに優れている、とする。小説とは、歴史では語ることのできない、〈外的形態をとった真実〉であり、〈生きている真実〉なのである。

「ゴリオ爺さんの密かな不幸の物語を読んだ後でも、自分の無感動ぶりの責任を、話が大げさだからとか、情緒が盛られすぎてるからとかと難じて、作者のせいにし、読者諸氏は夕食をおいしくいただくことだろう。ああ、このことはよく分かっておいてもらいたい。このドラマはフィクションでもなければ小説でもないのだ

ある。すべてが真実なのだ。あまりにも真実なので、誰でも自分の心に、同様の要素を認められるはずである。」(Le Père Goriot, Pléiade III, p.50)

グリオの物語は、All is true「すべてが真実なのだ」。虚構こそが、真実なのである。そして、バルザックの『人間喜劇』は、「すべてが真実なのだ」。

バルザックのレアリスムとは、小説に描かれたすべてのドラマが、すべての場面が、すべての細部が、「原理」に依拠していることに由来する。われわれ読者から見れば、それは現実の人間観察に基づいた鋭い「真実」の表現のようであり、バルザックをレアリストと呼称する根拠となっているだろう。だが、その認識とバルザックの認識との間には深淵ともいえるほどの隔たりがある。バルザックは自己の創作の根底には、普遍的眞実、永遠の眞実、不動の眞実があると信じており、われわれの方は、凡そそんなことを意識せず、ただ物語の展開に、人物の動きに、リアルさを感じているだけだからである。

だが、ボードレールを持ち出すまでもなく、バルザックの小説の特徴は、物語や人物のリアルさにあるのではない。現実からかけ離れた比類ない圧倒的な想像力、「幻視 vision」にある。たしかに、想像の核心には「眞実」がある。だが、その眞実が表現されている場は、あるいは『人間喜劇』の「場景」は、実はきわめて観念的であり、少しも現実的ではない。ボードレールに従えば、バルザックの人物は下層民から貴族にいたるまでみな天才である。拔き出した欲望や知性や情熱や徳や美学やその他諸々の並大抵ではない濃密に凝縮された人間的属性を持っている。物語は、初めと終わりだけ見るなら、あまりに劇的で、人物も物語も、とうてい本当にありうるとは思われない。そこに見出しされるのは、バルザックを「幻視者 visionnaire」と呼ぶにふさわ

しい巨大な想像力なのである。極論すれば、『人間喜劇』はきわめて豊かなイメージを持つ一種の観念劇の集合であり、少しもリアルではない。

しかし、初めと終わりを繋ぐ筋道の何と真実であることか。情熱の、欲望の、心の動きの、何と真実らしいことか。バルザックの小説には、「あまりにも真実なので、誰でも自分の中に、おそらく自分の心に、同様の要素を認められる」、そういう種類の、現実にはありうとは思われないがきわめて本当らしい、特別なリアリティがある。それは、バルザックのレアリスムが、「結果」にあるのではなく、「原理」にあるからなのである。

注

ここで参照した、ボードレルの『テオフィル・ゴーチエ』の中で書かれたバルザックについての一節を、以下に翻訳する。

「私は、バルザックの偉大なる栄光が、観察家と見なされることに由来する、と聞いて、いくどとなく驚かされた。彼の主要な功績は幻視家であることから、しかも熱烈な幻視家であることから来ている、と、常に私には思われていた。彼の登場人物は、みな、彼自身をも活気づけている生の熱気を授けられている。彼の書く物語は、すべて、夢のような深い色彩に富んでいる。貴族階級の頂点にいる人物から下層階級の底にいる人物まで、『人間喜劇』を演じる人物は、みな、実際の世界がわれわれに見せるもの以上に、生活においては過酷であり、諍いにおいては能動的で狡猾であり、不幸においては忍耐強く、享楽においては貪欲であり、献身においてはまるで天使のようである。要するに、バルザックにおいては、誰もが、門番でさえも、天才なのである。」(Baudelaire: *Théophile Gautier*, p.46, Éd. Poulet-Malassis et de Broise, Paris 1859)